



▲ 221 冊の写本が並ぶ「鶴城叢書」専用の書棚

郷土資料の散歩道

図書館郷土資料室

☎ 21-6111

鶴城叢書

昭和前期に始まった 地域資料の筆写事業

今月は市立米沢図書館の「鶴城叢書」を紹介します。郷土に残された貴重な古記録や古文書を借り受けて筆写したもので、第三代館長芦川良輔（昭和五年～十年）の時に始められました。図書館に揃え利用に供すると共に、長く保存しようとしたもので、将来は刊行も念頭に筆写事業が進められました。

当時、東北地方では『仙台叢書』（大正十三年）、『南部叢書』（盛岡・昭和二年）、『秋田叢書』（昭和五年）の刊行が始まり、そうした影響を受け、歴史ある米沢でも叢書の編集が始められたのです。「鶴城」とは米沢城の別称「舞鶴城」からとったものです。

筆写は文字の上手な元教師や郷土史家等に依頼、一冊ごと丁寧に写され製本されました。戦後、筆写者が少なくなった等の理由で休止となりましたが、二二六巻、二二二冊の筆写本が完成しました。

米沢の歴史を物語る 基礎資料群

「鶴城叢書」の中には、「米沢春秋」・「三重年表」・「米沢通鑑肇要」等の年表類、「鶴城叢談」・「米沢名臣嘉善録」等の人物伝、「米沢雑事記」・「今はむかし」等の随筆、「管見談」・「国政談」等の意見書、「米沢里人談」といった地誌類、「新集古案」「謙信公御書」等の古文書集などなど、多種多様な古記録・古文書が収録されています。そして、それぞれが米沢の歴史を調べる上での基礎的な資料として、戦後の歴史研究に大いに活用されました。昭和三十五年には貴重な基礎資料として、その一部（「三重年表」・「管見談」など一七点）が『山形県史』資料篇3と同4に活字化されました。

現在、原本が確認できない資料も

こうして筆写した資料原本の中には、その後、図書館等の資料に入っ



▲左の一冊は「管見談」。原本の雰囲気を残し筆写されています。

たものもあります。昭和二十九年には上杉家から「上杉文書」や「林泉文庫」等が図書館に寄贈され（「上杉文書」は平成十一年に博物館移管）、多くの原本が図書館や博物館で確認できます。また一方では、残念ながら原本の所在が確認できない資料も多くあります。そうしたことから、「鶴城叢書」は複写資料ではありますが、貴重な資料群といえます。

『仙台叢書』等のように刊行までは漕ぎ着けなかった「鶴城叢書」ですが、貴重な資料を将来に伝えるという意味では十二分に当初の目的を達成したといえます。また、先人達のこうした地道な努力の積み重ねによって、我々が数多くの資料を利用できることも忘れてはいけません。